

オックスフォード大学の伝統と T. H. グリーン ——ベリオル・カレッジを中心として——

行 安 茂

The Tradition of Oxford University and T. H. Green : A History of Balliol College

Shigeru YUKIYASU

周知のようにオックスフォード大学は多くのカレッジから成る組織体である。今その一つであるところのベリオル・カレッジをとりあげ、その歴史と伝統とを考察し、トマス・ヒル・グリーンを生んだベリオル・カレッジの背景と環境とを考察してみたい。筆者はグリーンの倫理学を研究してゆくうちにオックスフォード大学の歴史を解明していく必要をかねてから感じてきた。オックスフォード大学で学び、ここで生涯の殆んどを過したグリーンの倫理思想はオックスフォード大学という一つの社会的環境を離れては理解できないと考えられる。本稿はグリーンに視点をおいてベリオル・カレッジの史的背景を概観したものである。

1. ベリオル・カレッジの誕生とダーボーギラ夫人の功績

「オックスフォードやケンブリッジは最初自発的に、それから国王の大権の圧力の下でカレッジを貴重な召使として歓迎した。この友好的態度への動機は時代とともに変化してきた。カレッジは当初はオックスフォードですでに有望な学生が M. A. の学位および神学や法学のより高い学位の資格を与えられるために要求される長期の滞在期間を完成することができるための道とみなされた。後の時期にはカレッジは規律や宗教的一致への有益な手段としてみなされた。今日ではカレッジは社会生活の中心としてかつチューター組織としてみられている」⁽¹⁾。ところで、西欧諸大学創立の目的を考察するとつぎの5つの型に分類される⁽²⁾。第一は貧しい学生に居住地を与え、奨学資金を支給することによって間接的に教育目的に貢献するカレッジである。第二はある団体（たとえば修道院）がその会員に知識を普及させるために設立したゼミナールを起源とするカレッジである。第三は道徳的節操を広めるために創立さ

れたカレッジである。第四はアカデミックな学問研究を目的として創立されたカレッジである。第五は青年、とくに自由学科を学ぶ機会のなかった人々に対する教育の場として設立されたカレッジである。現存する西欧諸大学は以上の五つの型のいずれかに分類される。ベリオル・カレッジは第一の型、すなわち寄宿寮として出発した。さて、ベリオル・カレッジはいつ誰によって創立されたのであろうか。このカレッジは1263年に創立され、オックスフォード大学では2番目に古いカレッジとされているが⁽³⁾、「ベリオルの学生社会は少なくとも1266年から存在していた」⁽⁴⁾とも云われている。これより先1255年にはカレッジにあてる土地は指定されていたが、この土地の境界をめぐる争議が John of Balliol とダラムの主教パラチンとの間に起り、前者が敗北した。ヘンリー三世はベリオルのジョンに20ポンドを融通した。このことが1266年の国王文書に記録されているというのであるから、ベリオル・カレッジは1260年代に John of Balliol によって創立されたものと考えられる。当時の学寮はオックスフォードの効外（今のブロード街）の借家であった。これが Old Balliol Hall とよばれるものである。John of Balliol は土地と借家とを確保することに工面したのに対して、彼の妻ダーボーギラ夫人は学寮の内部整備に献身した。「ベリオルの学生は彼女の思いの中で大きな地位を占めた。彼女は学生へのサービスのために金と力を費した。彼女はかれらを信頼できる友人として取扱った」⁽⁵⁾。彼女はベリオルの校規 (Statutes) を作成し、学生⁽⁶⁾、管理者、学寮長の守るべき規則をつくった。これが The statutes of Der-vorguilla⁽⁷⁾ とよばれるものである。この校規は今までの慣習を成文化したものにはすぎず、別に新しい規則ではないが、最初の歴史的文書として重要性もっている。この校規はつぎの三分野にわたってき

められたものである。

A) 学生生活について

①学生は日曜日および聖霊降臨節には宗教的儀式に出席すること。②平日には学生は授業に出席し、大学の規則に従って研究にはげむこと。③学寮内では会話はラテン語を用いなければならない。④週に一度は全員が一緒に集まり、学寮長によって公表された題目について討論すること。⑤朝食と夕食とは共同食卓でとること。共同食卓の維持のために定額が捧げられること。もしある週において共同食卓の費用が定額を超過したならば、赤字の支払のために学生は資力に応じて割当てられること。

B) 学寮長について

①学寮長は学生によって選挙されること。学生は是認された校規と慣習とに従って学寮長に服従しなければならない。②学寮長の選挙は代理人 (Procurator) によって確認されたときにのみ有効であること。③学寮長は共同食卓および討論の司会をすることができる。④学寮長はかれの命令を無視する学生を共同食卓に参加させないことができる。

C) 代理人について

①代理人は学内のすべての団体の財産を管理する義務がある。②かれは金庫を管理し、学生に給費を支給すること。③かれはすべての不満を聞く義務をもつ。④かれは共同食卓への分担金を学生に課する義務をもつ。

以上がダーボーグイラ校規の主要点である。ダーボーグイラ夫人は Old Balliol Hall の東側に 3 軒の家屋を購入し、これを一つの House として学生の寄宿寮にした。これが New Balliol Hall とよばれるものである。ベリオル・カレッジの歴史を見ると、いろいろな人が寄付をし、これによって Foundation が設立された。これは学生に奨学資金を支給する財団である。ベリオルではこのような制度は1266年に始まった。1266年にヘンリー三世はベリオルのジョンに20ポンドを融通するように市長や役人に命令した。この金は学生に支給されることを目的とするものであった。当時奨学生は16人であり、1日8ペンスがベリオルのジョンから支給された。この会計係が代理人 (Procurator) である。ジョンの死後、かれの夫人を助けた有力な代理人はリチャード・スライクバーンであり、「1285年かれは学生に100ポンドを支給するようにベリオルのジョンの遺言執行者を説得した」⁽⁸⁾。ところでベリオル・カレッジにおいて奨学資金制度が生まれたのは何故であろうか。

勿論、それは貧しい学生に勉学の機会を与えるためであっただろうが、他の理由もあった。ベリオル・カレッジは最初寄宿寮として出発した。1230年頃にはオックスフォード大学は牧師が研究する場であった。しかし、牧師の中には「反抗的な、救い難い牧師」がいて市民および大学を困らせた。そのために1231年王は「学寮長の中の一人の規律または教授の下にいない牧師はオックスフォードにとどまることを許されない」⁽⁹⁾ という命令を出した。1234年にはローマ教皇の遣外使節の干渉を必要とするとされ、以後オックスフォード大学は王とローマ教皇とから管督され、干渉されるようになった。この頃から大学は教会と友好関係を結ぶようになった。教会側は第13世紀初期の「知的論争」に耐えるために大学で教えられている合理主義の精神を身につけ大学を知識の補給源として用いることの重要性を認識した。このために聖職者らは学生を給費生として大学に送り、かれらの行動および研究を厳重に管督し、宗教的儀式への出席を義務づけ、かくして学生を望ましい人間に形成する必要があるという見地から奨学資金制度が生まれた。これが1230年代に始まっていたのであるから、1260年代に創立されたベリオル・カレッジもこの制度を模倣したものと考えられる。創立初期のベリオル・カレッジを総括すればつぎのようになる。「ベリオル——ダーボーグイラが残したのだが——は全く学生から成る社会であった。それは宗教的儀式と密接な関係があったけれども、神学研究の場所であることを意図したわけではなかった。学生は科目における基礎的コースを完成してしまうや否や去ることになっていた。学寮は著しく貧しいものであった。適度の質の食物と宿泊とが奨学金を受ける身分から期待される唯一の利益であった。それ故、学生を学寮と結びつけるきずなは僅かであった。6, 7年の滞在は常にあり得たけれども、かれらは安息所を求めて見廻る誘惑をもつだろう。その社会を構成する人々の性格に完全な変化を起すには数年で十分だろう。慣習も急速に変化したことにわれわれが気付いても驚くことはない」⁽¹⁰⁾。

2. 第14世紀のベリオル・カレッジとサマーヴィルの功績

1340年にベリオルはウィリアム・フェルトンによって新しい基本財産を付加された。かれは自己の財産をベリオルの学生および学寮長に役立てるために耕地を捧げた。この土地から入る収入の一部をもつ

て学生の給費額が週8ペンスから12ペンスに引き上げられる見込であった。また収入の他の一部は図書や衣服の購入に使用される見込であった。しかしこのプランはローマ教皇の許可が得られなかったので、1361年までは実施されなかった。ノルマン家系のサマーヴィルは1340年に二つの耕地をベリオルの学寮長および学生に寄付した。かれは大学のために財産を使用してもらうに当って一つの条件を認めさせた。この条件とは「新しい校規」を自分に作成させよ、ということであった。幸い大学はこの条件を受け入れたので、サマーヴィルは独自の校規を起草した。この校規はダーボーグリア校規を破壊するものではなく、またそれを改正したものでもなく、全く別個のものであった。しかし二つの校規ができると、旧校規の下で奨学資金を受けている学生は新校規に服従する義務がないといって争議が起ったが、**Bishop of London** であるサイモン・サッドヴェリによってサマーヴィル校規は修正された。こうした問題はあったが、サマーヴィル校規によってカレッジの体質が大きく変革されたことは確かである。さて、この新校規⁽¹⁾は以前の校規とどのように違うであろうか。第一の相違点は奨学資金を受ける学生が新たに6人増加されたことである。そして、その適格者は学寮の学生によって選ばれること。適格者の基準は「正直、純粋、平和的で控え目であり、学問研究の能力をもち、進歩しようとする願いをもっているもの」とされた。そしてかれらに支給される金額は週12ペンスであった。第二点は学寮長がカレッジの全体集会によって選出されることである。旧校規では全体集会によってではなくて、単に学生によって学寮長が選出されていた。全体集会には学生の外にフェローも参加したものと考えられる。学寮長はカレッジの財産管理について全体集会に対して責任をもつ。旧校規の下ではこの管理は **Procurator** の手にあった。第三点はカレッジの規律を乱す行為に対する処罰が学寮長と2人の上級フェローとから構成される第一審裁判所において決定されることである。旧校規によればかかる裁判所は規定されておらず、学寮長が違反者を共同食卓に参加させない権限をもっていたにすぎなかった。この点一歩前進が見られ、大学の自治権が確立されたといつてよい。違反者が学寮長の前で審理されなければならないときは、違反者は裁判所補佐人を卒業生の中から選ぶことができた。第四点はカレッジの中に大学院の要素を確立したことである。これは旧校規には見られなかつた。

つぎにこれらの諸点についてやや細かい規則をとりあげてみよう。第一に、学寮長の選挙とかれの義務についての規定があげられる。投票所は礼拝堂であり、投票人はその外で待っており、秘密が保たれるために1人1人入って別々に坐っている学寮長と2人の投票検査人との前で投票する。このようにして新しく選ばれた学寮長はすべての校規および法令を守るという誓を上級フェロー (**Senior Fellow**) の前です。つぎに学寮長はウィチノーア荘園領主を訪問する。そして領主は異議なく選挙を確認する義務がある。これが終わった後上級フェローの2、3人が学寮長を **Visitor** に紹介する。第二に、学寮長は私室をもつ特権をもち、1人の給費生 (**Servitor**) が学寮長に割当てられる。学寮長は外来訪問者を接待するために贅沢にならない程度の会食を用意することができた。第三に、学寮長は大学の財政状態を調べ、会計検査会において説明する義務があった。この会において学寮長の説明が満足のゆかないものであるとき、あるいはかれが職務の遂行を怠ったり贅沢であったり著しく悪徳であったときには、免職させることができた。学寮長を除こうとするときは、まず上級フェローが **indignation meeting** を召集し、学寮長に警告を3回与えることをまかされる。第1回の警告で学寮長が改めないときは、2回、3回と警告を発し、3回注意してもまだ学寮長が反省しないときは、フェローは **Vistor** に告げる。後者はこの場合直ちに学寮長を免職させる義務がある。ところで学寮長は賃貸料を受けとったり、必要経費を支払い、剰余を会計に渡したりする義務をもつ。学寮長から委任された代理人の義務としてはサマーヴィル財団の奨学生に一定の金額を支払う義務がある。以上は学寮長の義務の細目の一端である。学寮長は年収最高40ポンド以内を有資格者とされ、フェローは年収5ポンド以内を有資格者とされた。

つぎにチューター制度にふれておきたい。サマーヴィル財団の奨学資金を受けている学生は6人であるが、この6人はそれぞれ1人の神学者をチューターとして割り当てられた。ここに一对一の師弟関係が成立した。ダーボーグリア財団の奨学資金を支給されている16人の学生が指導教授を制度としてもっていたかどうかは明らかではないが、ベリオルが創立以来かかる財団をもった理由を考えると学生は何らかの型で管督され、指導されていたとみてよい。すべての奨学生がそれぞれ1人のチューターをもた

なければならないという規則は第16世紀に入ってフォックスの校規によって初めて確立された。一般の学生 (**the commoner**) は第16世紀までは各自のチューターを自分で選ぶことになっていた。ベリオル・カレッジの学生は、すでに見てきたように, **scholar, commoner, servitor** の三種に身分上分けられる。奨学資金を受けている学生 (**scholar**) はすべて学寮に入るとき、法廷での追放判決を反論しないという誓約をすることになっていた。そしてこの誓約を尊重することがカレッジにおける最も健全な政策であった。もし悔悟の徴候が認められたならば、判決は取消されるのが通例であった。校規に違反し、処罰される行為はつぎのとおりである。偽証、聖物窃盗罪、殺人、姦淫、窃盗および強盗、けんか好きな性質、殴打等。

3. フォックスの校規と第16世紀のベリオル・カレッジ

第16世紀初期において **Bishop Fox** は新しい校規⁽¹²⁾を作成した。この規則は彼の全く新しい観念にもとづいて作成されたものではなくて、むしろ創立者達の意図を受けつぎ、この意図に最もよく適したカレッジの体質をつくろうとするために設けられた。フォックスの構想によればカレッジの体制は今までの民主主義的要素を廃止し、貴族政治の形態をとった。それとともに学問研究の自由が促進された。従来は神学研究が優勢であったので、かれはこれをゆるめるようにし、学生をして各自の追求を自由にさせる方向にもっていた。さてフォックスのカレッジ構想は身体にたとえられる。「会計係は腕であり、学生監は肩である。学寮長は頭であり、上級フェローは身体と頭とを一つの全体に結合する首である。」⁽¹³⁾ 会計係は上級会計係と下級会計係とに分けられる。大学の財産についての全管理権はかれらの手の中にあり、学寮の経常費はかれらによって規制される。学寮長はこれらの会計係を全般的に管理する。かれはいわば立憲君主であってものを「はっきりと見、思慮深く聞き、適度に味わい、適度なふさわしい方法で人の心を動かす」⁽¹⁴⁾ 役目をもった。学生監は学寮の規律を維持する。上級学生監 (**Senior Dean**) は図書館の管理に当る。外来者が学寮長またはフェローを同伴せずして図書館に入ることはないかどうか、読書において沈黙と秩序とが守られているかどうか、書物が適当に扱われているかどうかを監視するのが上級学生監の義務である。下級学生監

(**Junior Dean**) は祭服、金銀製食器類 (**Plate**)、その他礼拝堂の財産を管理する義務をもつ。

フェローは10人いるが、その中の2人は礼拝堂付牧師 (**chaplain**) であり、礼拝儀式を司る。上級フェローは学寮の伝統の保護者であり、かつ学寮長との交渉においてフェローのスポークスマンである。学寮長不在の場合は上級フェローは学寮長の代理人となる。フェローの中には **Bachelor, Master, Doctor** の三種類があり、10人をもって定員とした。かれらはすべて後輩を指導する義務があった。指導を受ける学生は10人であり、1人ずつ1人のフェローに所属する。フェローは自己の指導を受ける下級学生を指名し、その教育と行為とについて責任をもって指導する義務があった。この下級生は **scholastici** とよばれた。これらの学生は頭髪を削り、聖職の服装をし、テーブルではフェローに給仕する。かれらはフェローが食事を終った後に残ったパンで満足しなければならなかった。食事の時は聖書が声高く読まれる。会話はすべてラテン語を使用しなければならなかった。

フェローは給料としていわゆる **commons** を支給される。それは1週間に1シリング4ペンスであった。この外に年金が支給された。年金は **Master of Arts** では28シリング8ペンス、**Bachelor of Arts** では18シリング2ペンスであった。学寮長は40シリングを支給された。フェローになる資格は **Bachelor of Arts** をもっていること、よき性格をもっていること、学問に精通していること、指導に熱心であること、年間40シリング以上の所得を得ていないこと、である。フェローの地位は誰にでも(学内・学外を問わず)開かれているが、ベリオルの学生は外部の応募者よりも優先された。フェローは選挙によって決定される。この選挙をめぐって今まで腐敗がつきまとった。フォックスはこれを防止するために選挙人に投票を依頼する人、著名な人から推薦状をもらった人はフェローとなる資格はないという規則を設けた。学寮長になる資格は年令30才以上、聖職者の宗教的儀式に参加したことのある人、神学に精通した人とされた。

学内の諸規則の中にはつぎのような禁止条項がある。大学の門は冬は午後8時、夏は午後9時に錠が掛けられる。錠は学寮長のところに翌朝まで保管される。昼間に大学を出て行くときは学生の服装、態度、行先が厳重に調べられる。弓矢はリクリエーションのためであれば許可される。その他の武器はオ

ックスフォードを離れる旅行のための場合にのみ許可される。居酒屋、ビール店への出入は禁止された。ただし著名な外来者の招待を受けてこれらの場所へ行くことを命令されたときは別である。不適当な娯楽に耽ったり、旅役者、吟遊詩人、手品師の仲間に入ったりすることはさけるよう命令された。宴会やもてなしへの出費も厳重に制限された。もてなしの出費が特別高くつくときは、学寮長とフェローとの許可を必要とした。

フォックスの改革の中で注目されるべきものは **Visitor** が大学において自由に選ばれるようになったことである。これ以前は **Visitor** のカレッジに対する力が強かったようであり、そのために学内に不満が少なからず起った。フォックスはこれを一掃するために **Bishop of London and Lincoln** を無視した。「かれは学寮長やフェローにかれら自身の **Visitor** を選ぶ独自の特権を与え、さらに **Visitor** は、もしはっきりと招待されないならば、一年に一度以上カレッジに現われる資格がないことを定めた」⁽¹⁵⁾。これはベリオル・カレッジ体制の一大改革であり、自治権拡大のエポックでもあろう。しかし **Visitor** を大学が自由に選ぶことが実行されたのはその後200年経過してから、すなわち1691年からであるといわれている。第18世紀においては **Visitor** として **Bishop** を選ぶのが慣例となったが、最近では聖職者以外の俗人が選ばれているという。「フォックスはカレッジを神学的セミナーにしようとした。そしてかれは非常に成功したので、300年間神学的なものがベリオルの最も特色ある産物であった。そして生活の他の分野で著名になったベリオルの出身者は大部分ベリオルとの親密さが最も一時的であったような人々である」⁽¹⁶⁾。

4. 第十九世紀におけるベリオル・カレッジと B. ジョーウィット

ベリオル・カレッジは第19世紀に入って漸く改革を完成した。第18世紀のオックスフォード大学は最も衰退し、伝統的機能を発揮しなかったといわれている。産業革命の影響も大学内では何ら反応しなかった。大学教授の地位は牧師の閑職として扱われた。牧師は教授としての義務、すなわち法規上の講義をしなかったといわれている。良心的な牧師でも、他人に代講させて自分の義務を果たしていたというのであるから、大学における講義に対する責任感のほどが推察される。第19世紀に入っても退廃状態はつづ

いた。たとえば、学生は試験を受けないで **B. A.** を取得したという。大学は英国国教会の領分であったので、ローマカトリック信者、非国教徒、ユダヤ人には学位を与えなかったし、国民の大部分、とくに中産階級を排除した。要するにオックスフォード大学は宗教的にも階級的にも特別の人々の集まる大学であった⁽¹⁷⁾。以上のようなベリオルの伝統の衰退は1636年ラウド大主教によってオックスフォード大学の中世的校規が修正されたためこの伝統的校規が次第に無視されてきたことに起因したらしい。オックスフォード大学は最初はローマカトリック教会によって支配されていたが、後にはこの支配がなくなり、国王によって精査されるようになった。そしてその後大学は英国国教会の影響下に置かれるようになった。

リヒターによれば第19世紀におけるオックスフォード大学の改革による発展の方向はつぎの四つである⁽¹⁸⁾。第一はアリストテレスの哲学が強調されたことである。第二は一般教育 (**liberal education**) と紳士教育とが同一視され、その基礎学科はラテン語とギリシャ語とであった。第三は大学をロンドンでの政治権力の中心とすることである。大学が政界の活動の知的源泉となることである。第四は教会の意義を再確認したことである。オックスフォード大学は古代へ、過去へ知恵の泉を求めた。これとは対照的にケンブリッジ大学はニュートンによって代表されるように、自然哲学や科学の分野に特色があった⁽¹⁹⁾。オックスフォード大学が第19世紀においてもなおアリストテレスの影響を受けていることはつぎの一文によってもわかる。「われわれが人間である間は大部分アリストテレス的とならざるを得ない。何となれば偉大な学寮長は人間の思想、感情、見解、意見を分析しているにすぎないからである。……多くの主題において正確に考えることはアリストテレスのように考えることである。そしてわれわれはそれを知らないかもしれないが、意志しようがしまいがアリストテレスの弟子である」⁽²⁰⁾。イギリス哲学は分析的である。その伝統はアリストテレス哲学の影響によるものと考えられる。

オックスフォード大学において **Bachelor of arts** を取得するためには、7つの学科目と3つの哲学とを完全に修得することを要求された。7つの学科目とは文法、論理学、修辞学、幾何、音楽、算術、天文学であって前3つを **the trivium** とよび、後4つを **the quadrivium** とよんだ。文法はラテンで語あ

り、これは教育を受ける人の一般的言語とされ、またマスターの学位を得るために要求された。論理学は議論および厳密な演繹的思考の訓練のための手段として要求された。修辞学は作文および説得術を教える学科である。3つの哲学とは自然哲学、道徳哲学、形而上学である。オックスフォード大学は第16世紀、第17世紀において変化したが、アリストテレス哲学の研究と論理学の重要性とは依然としてつづいてきた。第19世紀のベリオルでは7つの学科は *Literae Humaniores* とよばれ、ギリシャ語とラテン語とを含んでいた。学生はこの基礎学科の試験に合格しなければ、*School of Mathematics and physics*, *School of Natural Science*, *School of Law and Modern History* の学科（これらの学科は19世紀初期に創設された）を選ぶことができない。1911年になって初めて科学や数学を選ぶ学生に対してはギリシャ語が免除されるようになった。ところで *B. A.* を得てから後さらに *M. A.* を得るには3ヶ年以上の研究期間が要求された。*Doctor of Theology* の学位を得るには16年から19年の期間が要求された。

第19世紀におけるベリオル・カレッジにおいて注目されることはパーソンズ博士が学寮長のとき、かれの努力によってオックスフォード大学全体に *New Examination Statutes* が制定されたことである。制定の時期は不明であるが、パーソンズの学寮長在職期間が1798—1819年までであるから、19世紀初期と考えられる。「ベリオルは1808年までは数学で *first Class* を得なかったし、人文学では1810年までは *first class* を得なかった。1820年になって初めてリストの首位にベリオル出身の人々を見出すのが普通となった」⁽²¹⁾。この試験の目的は「普通の *Pass Examination* のテストよりも一層骨の折れるテストを有能な人々に与えることであつた」⁽²²⁾。第19世紀におけるオックスフォード大学の改革の中で無視できないものは学寮長ジェンキンス博士の功績である。第一にかれは奨学資金を得る地位を公募にし、自由競争によって有能な学生を選ぶ方法を確立した。今までは寄付者による奨学資金財団が設立され、寄付者によって *scholarship* の条件が決められていた。従つてこの条件に適した学生のみに機会が与えられ、すべての学生に門戸が開かれているわけではなかった。ジョーウィットは「他のいかなる変化よりもこの変化をわれわれはカレッジの運命における転機とみなしてよい」⁽²³⁾と云っている。第二に、

ジェンキンスは1839年に聖職につく意向のない人々にフェローの地位が授与され得るという法令に同意した。これらの改革を受けついでベリオルの体制を一步前進させたのは *B. ジョーウィット* である。かれの学寮長在職期間は1870—1893年の間であるが、この間においてかれがベリオル・カレッジの改革に成功したのは第一にかれが当時学内で問題になっていた神学論争に答えるべく登場したからであり、第二にかれが政治的経済的圧力（産業革命による中産階級の台頭、第1回選挙法改正）に対応してカレッジ体制を改革しようとしたからである。ジョーウィットは1870年に *The Dialogues of Plato, 5 Vol.* の英訳を完成した。かれはギリシャ詩人やギリシャ哲学から多くを学んだが、その中でとくにプラトンの影響は最も強かった。「ジョーウィットは云つた。プラトンが扱わなかった問題はなかった。いかなる思想家もプラトンほどに真の予言者の想像力を多くもつた人はいない。誰もかれほどに体系づくりの悪徳からまぬかれた人はいない」と⁽²⁴⁾。ジョーウィットは体系を好まなかった。この点かれの影響を受けた *T. H. グリーン* とは全く異なる。「体系を採用する人は心の眼を閉る。かれは自分の理論を論ばくする諸事実に対して盲目となる。最後の真真理については誰も一見しかできない。しかし自己自身に忠実である人は誰でもかれ自身の中に生活の实际的行為に対して十分なだけの真理を見出す。キリスト教の本質的教義は事実の中で経験によって証明される。それらは歴史的文書とともに浮沈するものではない」⁽²⁵⁾。ジョーウィットの思想はギリシャ哲学の研究とキリスト教真理の自覚とによって支えられており、ここからかれの教育信念が出ていふと考えられる。

ジョーウィットの教育方法は消極的である。その意味は自から考えることによって価値と成果とを各人に知らしめることである。真理は自己の眼を通してのみ見られるのであり、他人の眼を通しては見られない。教師にできることは真理に達する道を示してやるだけである。学生は自主的に自からの眼を用いて真理を見るべく努力することを期待されている。教師は暗示を与え、自主的精神を起すところの「ソクラテスの方法」を用いる必要がある。ジョーウィットの第二の方法は学生の性格を考慮したうえで指導することである。「かれはカレッジのチューターとしての成功の秘訣を実際に理解した。その秘訣とは青年の性格を研究し、考察することに主として献身することである」⁽²⁶⁾。性格を理解したうえで「それ

故かれはある人には芸術論を分析するように教え、他の人には形而上学者になるよう教え、他の人には過去の思想および行為の源泉を探究するように教えた。かれは別の人々の中から討論者や政治家をつくった」⁽²⁷⁾。かれの第三の方法は直感力の活用である。「かれはしばしば生徒を散歩に連れて行ったり、朝食に招いたりした。……かれの力はとくにす早い知覚——事実についてのす早い知覚、性格についてのす早い知覚、なされるべき最善のことについてのす早い知覚、——にあった。かれが性格を洞察する力は非常に鋭敏であった。そしてそれはかれの安定した想像力のある共感によって助けられた」⁽²⁸⁾。このような直感力はジョーウィットの天分に負うところが大きいようにみえる。この直感力に加えてかれには「沈黙」による指導力があつた。「人がジョーウィットのところへ作文をもって行ったときジョーウィットは直ちに火の前でそれに接近して置かれている椅子に坐つて突然、断固たる含蓄のある論評を作品に対して生々とした力に加えるのが普通であつた。時々かれは沈黙に陥り、恐らく2、3分間何も云わないことがあつた。しかし人が立ち去ろうとするならば、ジョーウィットの最もよき言葉がまだ云わずに残っていることに気づくのがしばしばであつた。沈黙の休止期間は忙しい思考の間であつた」⁽²⁹⁾。

ジョーウィットの功績としては新しいビルディング（学寮、集会室、食料室、料理場）の建設があげられる。この外にかれは私財を投じて学寮内および礼拝堂内にコンサートホールを建てた。かれの死後つぎのような建設プランのメモ⁽³⁰⁾が発見された。これらのプランはかれの死後殆ど実現されたという。

- ① インド協会
- ② アシュモリー考古学博物館
- ③ 古代ギリシャ文化および芸術の博物館
- ④ 大学クリケット
- ⑤ 水泳プール
- ⑥ 聖マリア教会の修繕
- ⑦ 生理学実験室
- ⑧ ボードレー図書館の再整理
- ⑨ ブロード街の造林
- ⑩ 学部の造作取付け
- ⑪ チャーウェル川にかけの橋および土地の購入
- ⑫ 川の修理
- ⑬ 言語学部の設立
- ⑭ 創立記念祭の改善

⑮ オックスフォード劇場でのシェークスピア演劇またはギリシャ演劇

⑯ オックスフォードに医学部を創設すること

⑰ 聖マリア教会をステンドグラスで満たすこと

5. 第19世紀におけるベリオル・カレッジの課題と理想主義哲学の台頭

第19世紀のベリオルは学寮長 B. ジョーウィットと倫理学者 T. H. グリーンを生み、さらにグリーンの影響を受けた A. トインビー、E. バーカー、A. D. リンゼーを生み出した。これらの人々はすべてジョーウィットとグリーンとによって影響された理想主義的な学者である。第19世紀においてベリオルからこれらの学者が生まれたのは決して偶然ではなかった。そこには歴史的必然性ともいふべきものがあつた。1830—1870 年は英国思想界の危機の期間であつたという。この時期においてカレッジのチューターが取組まざるを得なかつた問題が三つあつた。第一は第18世紀から継承されてきた「浅い合理主義」(shallow rationalism) であり、第二はニューマンを中心とするオックスフォード運動の熱狂であり、第三は学生がその精神的根拠とする理想と権威とをもたないとき感じられる嫌悪と枯渇の一時期である。学生は第一の問題と第二の問題との間に立たされ、どちらにも徹底できず、自己の精神的支柱を失つたのであろう。そのためか、この時期は「過度の懷疑主義」の時代であり、「意気揚々と意気消沈」の交流する時代であつたといわれた。こうした問題の根本は神学上の論争であり、この論争もひききょうするに信仰と理性との関係をめぐる議論であつたようである。しかしこれが解決しない限り、学生は精神的に安定することはできなかつた。

当時イギリスの神学および形而上学はその島国根性的なる故をもって大陸から痛烈に批判された。その結果今まで伝統として守られてきた諸観念は無価値なものとして焼き払われた。そこでオックスフォードでは大陸からのこの破壊的批判に勇気をもって答え、同胞にも同じような勇気を振り起すことのできる人が求められた。ベリオルの学生も学問におけるかかる指導者を要望していた。当時の学生の話題は神学についてであつた。1827—1846年の間にベリオルにおいては W. G. ウォード⁽³¹⁾ が神学の議論においては著しい存在であつた。かれは知的に鋭く、道徳的に高潔であり、その議論において他の追随を許さず、学生に非常な影響を与えた。かれは学生に

「何も信ずるな、さもなければ一つの真の教会を信ぜよ」⁽³²⁾と云った。「ローマはかれの最後の避難港であろう」⁽³³⁾という見方からしてウォードは **Romanism** に立つ人と考えられる。

ところで、ウォードは数学者であり、音楽以外の芸術を好まず、過去を顧みることなく一定の前提から議論を展開する無敵の能力をもっていた。最初かれはソクラテスであったが、次第にソフィスト的となった。そして遂にかれが影響を与えた人々の心や性格は混乱され、破壊されたという。⁽³⁴⁾ ベリオルの学生は精神的にも知的にも「一種の中風」(a kind of paralysis) で苦しめられた。オックスフォードが英国国教会の影響の強い中心地であるだけに、カトリック的なウォードの影響はベリオルの学生を葛藤に追いつめたのであろう。学生は根本的信念を失ってしまい、学問研究の興味を失った。この知的混乱状態を克服し、学生に信念と勇気とを与え得る指導者がベリオルにおいて求められた。1838年にジョーウィットはフェローに選ばれ、グリーンは1860年にフェローに選ばれた。その理由の一つはこれらの人々がつぎのような理論と確信とをもっていたことにありとみてよい。「かれらが教えた第一の教訓は常にこうであった。人々が理論よりも偉大であること、実践が人生の目的であること、そしてすべての実践は人間精神における固有な信仰に基礎づけられなければならないこと。第二の教訓はこの信仰が何らかの教派の教義と切っても切れない関係にないこと、そしてその信仰がいわゆる歴史的事実の真理に決して依存しないことである。第三の教訓は信仰によって命じられた限界内では理性が唯一の信頼に足る案内者であることである」⁽³⁵⁾。これからわかるように、信仰と理性とをいかにして結合するかという問題がジョーウィット、ケアード、グリーン課題であった。これを教育の実践において解決しようとしたのがジョーウィットであり、倫理学において理論的体系的に解決しようとしたのがグリーンである。

英国にドイツ理想主義が導入されたのはコールリッジを通してであるが、かれは1794年6月のある朝ベリオル・カレッジのフィアー・ビルディングを訪れ、ロバート・サウジーと会見した。「コールリッジのベリオルへの最初の訪問は最後でもあった。しかしベリオル方式の目的はこれまで常にサウジーのような人々にコールリッジや同僚作家ワーズワースの思想を印象づけることであった」⁽³⁶⁾。ドイツ哲学

はジョーウィットを通して一層学問的に研究されてきた。「ジョーウィットはドイツ神学者を通して進むよう、そして哲学的な理想主義者の原文に直参するよう、グリーンや他の人々を激励した。このようにして直接得た知識が哲学的学識の新しい水準を供給した。なぜならば大抵の教育を受けた英国人はコールリッジやカーライルから由来するドイツ思想の翻訳を受けとったからである。コールリッジもカーライルもかれらがその作品を称讃すべく要求したドイツ哲学者をものにしてはいなかったから」⁽³⁷⁾。このようなドイツ理想主義哲学を学びながら、恰もこれを武器として用いるかのようにして、当時問題であった信仰と理性との関係を明らかにした人として経済史家 A. トインビーがあげられる。「かれは奇蹟を信ぜず、教義には冷淡であったが、神——『正義を支持する我々自身ならざる永遠者』——の普遍的な存在を深く意識していた。『この世には永久に存在する都市はない』とか『見得るものはかなきものであり、見えざるものが永遠である』というような忠実な信仰の言葉は彼によって存在の最深奥の表現であった。感覚の世界は幻の建物に過ぎなかった。真の存在は唯観念の世界にのみ存在していた。良心と義務意識、人間の理想的善についての観念、達し得ざる完成を得んとする望み——これらは、唯物哲学が説明することも、言い紛すことも出来ない根本的な事実であった。しかし彼の信条が超感覚的になればなる程、彼には、行動的な、この世に役立つ生活の必要性が益々大となるように思えた。彼は、彼の持っている如き理想主義は、唯人類のための精神的な献身によってのみその存在を正しく証明し得るものであると常に感じていた。『爾等彼等の収穫によりて彼等を知り得べし。』彼にとって、冷淡な神秘主義ほど厭わしいものはなかった。彼は、出来れば、神秘家という名前を否認することを欲したのであろう。彼の信条は、超感覚的ではあったが、理性的信仰であった」⁽³⁸⁾。

6. ベリオル・カレッジにおけるT. H.グリーン

グリーンは1855年にベリオル・カレッジに入学し、以後幾多の苦難や失敗を経て1878年にオックスフォード大学の道徳哲学の教授に就任し、1882年46才の若さで逝去した。ベリオルに関係すること約27年、この間においてかれに直面した諸問題はカレッジの歴史と伝統において重要であるので、ベリオルにおけるグリーン歩みを考察してみよう。1855年に入

学したかれは大学の講義内容がラグビー校のそれと殆ど同一であるので、失望した。そのためかれは怠慢になり“moderations”では **second class** を得たにすぎなかった。グリーンは当時ジョーウィットをチューターとしていたので、この指導者によって激励されたという。その効あってか、**1859年**グリーンは **Literae Humaniores** の試験において **first class** を得た。つづいてかれは「法律および近代史科」の試験を受けるべく6ヶ月努力したが、**third class** を得たにすぎなかった。**1860年**グリーンはベリオルにおいて古代史（ギリシャ史）および近代史（英国史および初期ヨーロッパ史）を講義すべく採用された。古代史は人文学科の学生に対してなされ、近代史は「法律および近代史科」の学生に対して講義された。**1860年**にグリーンはフェローに選ばれた。グリーンがフェローの地位についたことは注目すべき事件であった。「何となればグリーンはベリオルの歴史においてはフェローシップの地位を占めた最初の俗人であったからである。改革以前はこのような地位は英国国教会によって任命された牧師によってのみ占められ得た。」⁽³⁹⁾すでに考察したように**1839年**以後フェローシップへの道は誰にも自由に開かれるようになったが、グリーンにおいて初めて実現された。**1863年**グリーンはアリストテレスの「ニコマコス倫理学」を講義した。同年かれは E. ケアードと共同して「ニコマコス倫理学」を編集し、発刊しようとしたが、完成することができなかった。**1866年**、グリーンは、グラント版「ニコマコス倫理学」の出版を記念して **North British Review** に「アリストテレスの哲学」という論文をのせた。**1863年**の終り頃、グリーンは F. C. パウルの「キリスト教会史」を英訳しかけたが、完成できなかった。グリーンがこのドイツ神学者を知るようになったのはジョーウィットによるパウロ書簡の編集を通してであった。

1864年グリーンは **junior Fellow** になった。かれは学生によってつぎのように印象づけられた。「**1864年**に私がオックスフォードにきたとき、グリーンはベリオルの下級フェローの1人であった。当時かれは大学では何ら職務をもっていなかったが、青年たちの間にはグリーンが異常な能力と性格とをもっていているという印象があった。そして私はよく憶えているが、グリーンは顔は常にわれわれの興味を刺戟した。かれは当時全体の様子や容貌が他の誰とも非常に違っていた。かれは服装については非常に無とん

着であったので、そのことは他の誰にも気取った態度であるようにみえたことであっただろう。しかしかれにおいてはそれは明らかにわざとらしくない単純性の一部であった。リデル氏の死去に伴ないグリーンは哲学の講義をするように任命された。われわれは当時最後の優等卒業試験のために仕事を始めていた。グリーンは最初の講義は『倫理学』についてであっ」⁽⁴⁰⁾。「リデル氏」は**1866年**に逝去した。グリーンはかれの後をうけて哲学の講義をした。**1870年**に E. パーマーがチューターの職務を辞任し、同年にはジョーウィットは学寮長となった。ここにベリオルは3人のチューターを失った。これらの空席を補うためにグリーンは**1870年**チューターの職務を任命された。これより先**1866年**にグリーンは「上級学生監」(**Senior Dean**)の職務についた。この仕事は「毎週の論文を課し、ざっと目を通すこと、**College Examination** を管理すること、学寮や料理

場を視察することの義務」⁽⁴¹⁾を課せられた。ところでチューターとしてのグリーンの仕事はつぎのようなものであった。①一定の講義をすること、②週に一度ないし二度一定数の生徒と会い、かれらの課題に目を通し、大学の試験のために手助けをすること、③かれらの厚生福祉に対して全般的責任をもつこと。学生にとっては教師は年長の友人であり、かれの将来の生活に対する案内者であった。教師としてのチューターは研究と講義と生活指導という三つの義務を負わされた。「グリーンがベリオルでチューターの地位についたときは、この職務の伝統はかなり固定しておりかつ比較的高い水準に固定されていた」⁽⁴²⁾。ところで、**1870年**には「グリーンはすでにチューターの職務を占めていた最初の俗人であっただろう」⁽⁴³⁾と云われている。グリーンはフェローとしてもチューターとしても最初の俗人であったわけである。チューターはつぎのような慣例に従っていた。「聖餐式が執行される日曜日の前夜学生達に講演することが長い間ベリオルのチューターの習慣となっていた。グリーンがチューターとなったとき、かれは俗人としてこの慣習をつづけるべきかどうかを考えなければならなかった。聖職按手式を必要条件とする英国国教会には前例がなかったが、非国教徒、とくに俗人の説教者を大いに用いるメソジスト教徒の間では前例があった。グリーンは事実二度だけベリオルで俗人の説教をした。最初は**1870年**に『神の証言について』、二度目は『信仰について』であった」⁽⁴⁴⁾。

さてすでにのべたように、オックスフォード大学はアリストテレス哲学の研究を伝統としてきた。グリーンはアリストテレス哲学をつぎのように受けた。「もしグリーンが選ぶことが自由であったならば、かれは教師としてそれほど力をアリストテレスに費さなかったであろう。かれはギリシャの天才の産物に独特の魅力または興味をもつ人々の中の1人ではなかった。そしてかれは実践的諸目的に対してよき学者であったけれども、言葉によって自由に動くようなことはなかった。かれは原文の細部にわたる解釈に十分な注意を与えていないのではないかという心配で絶えず悩まされていた。しかし『倫理学』（『ニコマコス倫理学』）をかれの主題の一つにするよう事情によって導かれたので、かれはその講義に力を注いだ。そしてかれはそれを他の題目と同じほどに教育的にかつ効果的にした。かれは『倫理学』を近代的諸問題についての議論のきっかけ口として用いたり、その書物に含まれている諸観念が歴史的にどのように発展してきたかを説明したり、その諸観念をギリシャの文学や歴史から説明したりすることによって効果的にしたのではなかった。アリストテレスの中に最後の表現を見出す人生論はそれ自身の価値にもとづいてグリーンに訴えた。それは本質的にはグリーン自身の原理と同じ原理に基礎づけられた。すなわち、人間の内にあるより高いあるいは合理的な本性は知識への衝動および社会への衝動が共通の根をもつところのものであること、これが人間をして真に最も人間たらしめ、かつ最も神のようにせしめるものであること、そしてこの本性の成長を促すことが、かれが同胞に対してなし得る最高の奉仕であること」⁽⁴⁶⁾。このような見地からアリストテレスを研究することによってまとめられたのが「倫理学序説」（*Prolegomena to Ethics*）である。「この頃、オックスフォードでの哲学教育はアリストテレスのある作品に集中しており、この外にプラトンの部分が最近加えられた。近代哲学は公的には課程の一部として殆んど認められなかった。しかし、ミルの書物とくにかれの『倫理学』は広く読まれた。そして直接的同化によってあるいはミルの書物が惹起する議論や批判を通して知的影響を与えるものの中では最も有力な要素であった。プラトンおよびアリストテレスの研究は最近になって新しい局面に集中した。ドイツ哲学、とくにジョーウィットやパティスンのような人々を通してはたらくドイツ哲学史の知識の増大とともにそれは（流行の対照法を

用いれば）次第に『文学的』でなくなり、一層『哲学的』となってきた。換言すれば、かれらの作品は文化という平凡な文句についての教訓的分析なり、すばらしい批判として扱われることが少なくなり、人間生活および世界についての体系的見解の部分的表現として扱われることが多くなり始めた」⁽⁴⁶⁾。要するに、オックスフォード大学では古典の研究が重視され、学問的に研究する方法が始まったのである。

以上ベリオル・カレッジについて概観したが、本稿では筆者が第19世紀のオックスフォード大学に関心をもっているためもあるが第16、第17世紀のベリオル・カレッジについては殆どふれることができなかった。また第18世紀のベリオルについてもほんの僅かしか言及されなかった。これらの時期におけるベリオル・カレッジはこの時期の英国史とともに考察されなければならない今後の課題である。とくに宗派やその教義、図書館の歴史とともにベリオル・カレッジを考察することが残された重要な問題のようにみえる。これらについての考究は他日を期したい。

（注）

- （1）H. W. Charless Davis, *A History of Balliol College*, Basil Blackwell, 1963, p. 1
- （2）*ibid.* pp. 2—3
- （3）中央公論、昭和39年4月号、233頁「オックスフォード大学」を参照。
- （4）H. W. Charless Davis, *A History of Balliol College*, p. 8
- （5）*ibid.* p. 9
- （6）学生は *scholar* の訳であるが、ベリオルではこれは一定の奨学資金を支給され、かつ学寮に寄宿する学生を意味する。それ故、それは本来「給費生」とよばれるべきものである。本稿ではこのような身分を意味する言葉として「学生」という語を用いた。
- （7）この校規の細部については H. W. Charless Davis, *A History of Balliol College*, Chapter I, pp. 11—19 を参照されたい。
- （8）H. W. Charless Davis, *A History of Balliol College*, p. 14
- （9）*ibid.* p. 4
- （10）*ibid.* p. 18
- （11）サマーヴィル校規の細部については H. W. Charless Davis, *A History of Balliol Col-*

- lege, Chapter II を参照されたい。
- (12) フォックスの校規については同書第4章を参照されたい。
- (13) H. W. Charless Davis, *A History of Balliol College*, p. 61
- (14) *ibid.* p. 61
- (15) *ibid.* p. 64
 Visitor の適訳が見つからないので本稿では原語のまま使用することにした。Ency. Brit. によれば Visitation には三種類ある。第一は Ecclesiastical Visitation, 第二は Charitable Visitation, 第三は heraldic Visitation である。第一の教会訪問は各教区の世俗的霊的状态を確認するために週期的に視察することを意味するので、フォックスの時代の Visitor はこの役目を果す人と考えられる。
- (16) H. W. Charless Davis, *A History of Balliol College*, pp. 65—66
- (17) Melvin Richter, *The Politics of Conscience*, Weidenfeld and Nicolson, 1964, p. 58
- (18) *ibid.* p. 55
- (19) 池田栄著「イギリス自主精神の本質と起源」, 弘文堂, 昭和12年
- (20) Melvin Richter, *The Politics of Conscience*, p. 56
- (21) H. W. Charless Davis, *A History of Balliol College*, p. 181
- (22) *ibid.* p. 181
- (23) *ibid.* p. 184
- (24) *ibid.* pp. 190—191
- (25) *ibid.* p. 190
- (26) *ibid.* p. 201
- (27) *ibid.* p. 194
- (28) *ibid.* p. 205
- (29) *ibid.* p. 205
- (30) *ibid.* p. 213
- (31) W. G. Ward (1812—1882) イギリスのローマカトリック学者。オックスフォード運動の代表者ニューマンの弟子。1834年にペリオルのフェローとなる。かれの著書「キリスト教会の理想」においてかれは「英国国教会の唯一の望みはローマ教会に服従することにある」と云った。Ency. Brit. 参照
- (32) H. W. Charless Davis, *A History of Balliol College*, p. 187
- (33) *ibid.* p. 186
- (34) *ibid.* pp. 187—188
- (35) *ibid.* p. 177
- (36) *ibid.* p. 179
- (37) Melvin Richter, *The Politics of Conscience*, p. 71
- (38) A. トインビー著「英国産業革命史」(川喜田孝哉・杉浦滋・斉藤泰次郎・原田三郎訳), 高山書院, 昭和23年, 13—14頁
- (39) Melvin Richter, *The Politics of Conscience*, p. 98
- (40) R. L. Nettleship, *Memoir of Thomas Hill Green*, Longmans, 1906, p. 91
- (41) *ibid.* p. 85
- (42) *ibid.* p. 90
- (43) *ibid.* p. 86
- (44) Melvin Richter, *The Politics of Conscience* p. 98
- (45) R. L. Nettleship, *Memoir of Thomas Hill Green*, pp. 102—103
- (46) *ibid.* pp. 100—101